



大衆社会が作った江戸文化

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝



十返舎一九作・画「東海道中膝栗毛発端」文化十一年(1814)。駿府で武家の子として生まれた一九は、駿府町奉行とともに大坂へ上り、浄瑠璃を執筆。江戸へ移り、黄表紙作品を発表。滑稽本「東海道中膝栗毛」は読者の熱狂的な支持を得た。

幕府が発達して百年でやって来た華やかな元禄時代から、江戸の文明が爛熟して最も輝いた文化・文政の時代を経て幕末までの約百六十年間には色々なことが起こります。最初の百年でピークに達した人口と経済が、それ以上の拡大の余地を失って平準化し、さらに地域によっては若干の後退期に入りました。

外国の干渉もなく、平和であることが当然のことになり、天災を除けば平穏無事、天下泰平の世の中が続くことが当たり前の世界でした。中世の「憂き世」から、楽しんで暮らす「浮き世」に変わったのです。

元禄時代を生きた大坂の狂歌師・油煙斎貞柳の辞世の歌「百居ても同じ浮き世に同じ花 月はまんまる雪は白たへ」には、永遠に続く天下泰平への確信が詠ま

れており、これは、この時代を生きた人々の共通の感覚でした。

江戸時代の有名な文人を見ますと、徳川御三卿や大名から農民や町人の子供たちまでが、夫々の才能によって大きな拍手をもって社会全体に迎えられています。

同じことが儒者や医師、博物学や植物学、蘭学、古美術収集や発明の世界にも言えます。優れた匠たちの技にも惜しみない賞賛が与えられ、農業の技術改革や農村を支える思想など、農民の手によって書かれた多くの本が広く読まれました。あらゆる階層の人々の手によって書かれた旅や人生観の随筆は数千点にのぼり、江戸研究の資料の宝庫となっています。

この新しい時代の寵児たちの才能を持って囃したのは、自由と平和と経済力を満喫していた武家

以外の社会であり、豊かさを肌で感じ始めていた農村でした。

西欧の華やかな文化が、宮廷と都市のごく一部の富裕層を中心に練り広げられたのに対して、日本では、一般大衆社会が徐々に武家文化を圧倒する勢いで日本中に文化を作り上げていったと言えます。

三都があつて、人々が往来することで都会の文化は大変な速さで全国に広がっていきました。農民たちも、旅や出稼ぎなどの幅広い経験を持ち、都市近郊の農村では、都会と一体化した経営で得た経済力に支えられて、活発に文化活動に加わりました。全国に広がった富裕な農民たちは、あらゆる文化の一大スポンサーとなったのです。江戸芝居も上方の浄瑠璃も大相撲も、地方巡業が大きな収入源でした。